



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成21(2009)年
1月号
通巻461号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

発行日 平成21年1月23日
発行所 大倭出版局
〒631 0042 奈良市大倭町1の12
電話 (0742)44 0015
印刷 大倭印刷株式会社
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



土師部杜(野見宿禰住居址) 齋藤 正宏さん撮影(文・4頁)

昭和38(1963)年12月23日 降誕祭法話より

世界に羽ばたく大倭の教え

法主 矢追 日聖 (満52歳)

大倭教とは如何なる宗教か

今朝六時頃、東の方を仰いでいると、春日から纏向の山の方にかけて、一線に黒い雲が掛かっていましたが、その内側からきれいな朝日が出ておりました。時間が経つに従って雲一つない晴天になり、何かしら嬉しい思いが致しました。過去を振り返ると、雪や吹雪の日もございましたが、今年の私の誕生日は本当に珍しく天候に恵まれて、現界の皆さん方は勿論ですが、霊界からも非常なお祝いの仕方を受け、全く感激しておつた次第でございます。

明治四十四年の十二月二十三日に私は生まれたらしい。今日で満五十二歳になりました。人間がこの世に生まれて来る時には、何か一つの使命というもの、役目を持って来ているんです。

大倭教として宗教で立つべき私の使命は、生まれる前からすでに定まっておつたんです。その自覚は十六、七歳頃にはつきりと掴んでいました。これは誰かから言われたのではなく、また自分で勉強して知識から来たものでもなく、全て霊界からの指図であつたんです。言い換えますと、大倭教は天啓によって生まれて来た宗教という事になります。私には宗教的な師匠もおりませんし、どこの宗教にも参加した事もございません。全く白紙の状態で、ただ神の指示のまにまに今日まで参つて来たんです。

大倭教は全て神意に基づいて、神のま

にまに出来て来た宗教である事を皆さん方にまず自覚して頂きたいと思えます。

霊界の理想

大倭霊団という太加天腹^{たかまのはら}が霊界の総本家のようにな形になっておるらしいんです。霊界でもいろいろと分家があるんですね。

私の宿命は、大倭霊団の中の代表として、この地上に生まれて来たらしい。これは非常に自惚れた考えですが、どうもそうらしいんです。

霊界を代表した人間としてこの世に生まれて来て、霊界と現界の中間に立つて現在の人間社会を浄化し良くしていく。言い換えれば神意に基づく社会にしていくような役目を、小さいながらも私が持っているんです。霊的な働きは、現界に生きておる人間や、この地球上に有るいろんな物質を通してなければなりません。そうでなければ本當の霊界の仕事は出来ないらしい。そういう意味で、たまたま私が霊界の代表として、しかも日本の中でも奈良県の大和、大倭の中心に生まれて来た訳なんです。

私は霊界と現界のアンテナのような役目をしておると思うんです。大倭の霊界が主体となって出て来る神意というものを、神様の心というものを私人間界に通わせていく。霊界の指示通りの人間社会を創っていく。私一代では決してこの霊界の理想は実現しませんが、私がその第一回目の捨石のような基礎の役目で来ておるらしい。

私はこれから何をすべきかという事は何も考えておりません。一切霊界からの指図に基づいていて、私はロボットのような形で動いておるに過ぎないんです。

これはとても大きな話で、こういうような事は

気狂いでなきや言えない事なんですが、私も二十、三十代まではこうした事に対して非常に疑いを持っていました。自惚れてはせんか、天狗になっておりせんか、自分の潜在意識でそんな事を言うのかと、自己反省を長い期間して来たんです。

使命の自覚

私が十四、五歳の頃より、霊界から私に対しての呼び名は聖徳法主です。霊界の事も、宗教が何たるかも何にも分からないんですが、いかなる霊界人も私に対して聖徳法主と呼ぶんです。初めは誰の事か何回も疑ったんです。その時の私の戸籍名は矢追隆家で、これは私が生まれた時の名前です。しかし、宗教の道に入ってから戸籍名は日聖に変わりました。この日聖も霊界から常に呼ばれる名称なんです。

つまり、資格で呼ぶ場合には聖徳法主と呼び、名前の時には日聖と呼ばれるんです。

当時の私はまだ宗教で行くとは考えていなかったけれど、霊界からしよつちゅういろいろんな事を言われるので、自分の使命というものはそんなところにあるのかな、これではどうしたって逃げる事は出来ないなど、いよいよ肚を決めたのが十七歳の時です。数えの十七歳ですから満の十五歳、昔では元服の年頃になります。この時から、自分の思惑の宗教ではなくて、どうあっても一切霊界からの神示に基づいた宗教で行かなければいけないんだ、という自覚をはっきりと持つようになって行ったんです。

考古学の道と鎮魂の意味

それからは疑う事もなくなり、いろんな勉強も

したんですが、宗教、哲学に関しての本は一切読む事が出来なかった。各宗教の教理とか、仏教の哲学的な面ですね、そういう書籍を仮に読もうとしても、目の奥から針で刺されたようになり、本が読めないんです。読んだとしてもせいぜい二頁で、後は読めなくなってくる。しかし、その当時は宗教で行くんだから、一応世間の宗教を知らなきやいかんという人間根性で本は買っただけですが霊界はもう全然読ませてくれなかった。今も宗教関係の本は持っておりますが、どの本を見たって手垢も付いてなくて、中はきれいなもんです。

そこで、今度は唯心的なもの止めに、あちらこちらで発掘される出土品を調査し研究する考古学を、大学で六年間専攻しておったんです。もうおおよそ自分が宗教で一生行かなきやならんという宿命を自覚しながら、徹底した唯物史観でもってずっと考古学を勉強して来たんです。そのお陰で古代の日本の文化についてかなり知識を持ってた事を喜んでいました。

ところが、一つ引っかけたて来るのは古墳墓というものです。これは日本の大和朝時代が主です。高塚式の古墳は河内、南河内にも随分ございますし、大阪の百舌鳥^{ももぢり}の方に行きましても累々として造られております。大和には特に多い。私はこうした古墳の方に重点を置きました。

墳墓ですから葬られておる人がある。ところが記録がないし文字がはっきりしておりません。前方後円墳のような大きな塚は、果たして誰を埋葬したもののなのかという事が分かっていない。私は別にそうしたものを研究するつもりはなかったんですが、考古学をやっておるがために古墳をやらざるをえなくなつて来たんです。

現地へ古墳の調査、発掘にも参りました。そうした時に、古墳の中からもいろいろな神秘的な霊示と

か、そこに葬られておる人の霊格の程度とか、学者では分らない事が分かつて来る。そんな事にぶつかりました。

これは歴史とは別になりますが、古墳をやるにつけてその古墳に葬られておる人の霊というものが自分が自分で分かつて来たんです。その時代に大きな高塚式の古墳に葬られておる人は、当時の社会においても、霊的な資格においても、かなり高い位置におる人なんです。そうした者が現在各地に埋もれている。幽界において浮かばれないとよく言いますが、そういう形であるんです。

ところが、その霊体をあたって見ますと、すべて大倭の霊界の中におる人ばかりなんです。やはり大倭の霊界というものは本家であるがために、高級霊が多いんです。だから高塚式古墳群の中に葬られているような人達は、霊界に戻ると全部元の大倭の霊界の中に戻って来ています。これが、下級霊であればそう大した事はないんですが、高級霊であるがために反面うるさいんです。考え様によっては社会のいろんな問題を引き起こす原因になったりします。

私が大倭代表としてこの地上に出されておる関係上、近くのそうした古墳、そういうものも一つひとつ説明していかなければ霊界の方が治まらないんです。これは日本民族の祖先ですが、例えば、戦争を引き起こすような原因になったり、世界的な問題になることもあります。いろんな問題が霊の世界の中にも含まれており、それが現在の政治とかにも出て来ておるんです。

そうした時に、現界ではいろんな人達が考えてやって来ておりますが、霊界の方からも魂を全面的に鎮めていかなければ、我々人間社会というものが上手くいかないんです。そういう程度的事は学生時代にすでに体得しておりました。

現界と霊界を結ぶ合言葉

学校を出てから宗教を専門に私は行っておるんですが、本を読むんでなし、お経でもそない読むんではなし、殆んどが霊界からのいろいろな指図によつておるんです。宗教の味というものは、神ながらの道とはいかなるものかという事も、自分自身でぼちぼちと分かつて来た。

大倭の宗教は神ながらの道なんです。これは、文字で書いたたり、口で喋つたり人に教えたりと、簡単に出来るものではない、本当に体験した者が持つ味の世界なんです。体験を通して来なければいけない。神ながらの法は我々の日々の生活と結び付き、含まれているという事を自分で体得しなければいけない。宗教は宗教、現実の生活は現実の生活と切り離れたものでは決してない。全部一つのものなんです。

私が大倭教として立つた時は、日本の終戦時の昭和二十年八月十五日だった。霊界からはつきりと、これから大倭教として宗教で立つんだと仰せつかりました。

昭和二十年までは、自分が宗教で立つべく人間的な稽古であり勉強であつたんです。ところが、終戦を機にして、今度は逆にそこまで体得して来た自分の持ち味を、社会に向かって教えていかなければいけない。これからは本場の仕事なんだと。

大倭の霊界と現界の一つの合言葉というものはすなわち奈母太加天腹なんです。大倭の霊界ないし全世界の霊界に通ずる一つの約束の言葉は、奈母太加天腹であり、これは霊界と現界を結び付ける暗号みたいなもの、ひとつの符丁なんです。

日蓮と霊界が直結するには南無妙法蓮華経で良かった。それはよく通じると思つてます。或いは

法然上人でしたら南無阿弥陀仏という弥陀の称号を持つて霊界と結び付けておる。これは自惚れであるかも知れませんが、霊界と現界の結びの源泉においては、奈母太加天腹という言葉が、今の時代に霊界に通用する言葉なんです。

今日までのものは大体が皆古いと思つてますが現代新しく霊界と通じる神言葉、いわゆる言霊として昭和二十年の時に霊界の方から言われたんです。それを言われたのは大國主命です。

そのように現界と霊界が結び付けられて、小さく日本において大倭教として発足した訳です。

日本のあるべき方向性

終戦の時、一日本の国民として私も皆さんと同じように涙を流して神様の前で拜んでいたら、地球上のいかなる国にも、日の丸の旗が翻つておる霊界の実相が、目の前にパツと見えたんです。武力戦は負けたが日の丸が、全世界に閃いているのは一体何事だろうと直感的に考えてみた。

その時神さんがおっしゃるには、武力は神の道ではないと言つ。今は罪の深い者が現世に生まれて来て、霊界も鎮まつていないから、現界が闘争の場になつておる。永遠の本当に幸せな社会が出来て来るまでの間には嵐もあり風もある。

日本は世界の国の中において一番尊い土地なんだ。宗教にしても、日本は本場の宗教が突つていく場所なんだ。だから精神的にも宗教的にも、世界の人達をリードしていくような素質を持つておる。世界の人達が日本を親の国だというようないふ気持で慕い、日本人を尊敬してくれるようにならなければいけない。

そういう良い環境の国だから、邪教も同じように広まつていく。しかし世界の一つの模範国とし

て日本は天国である、いわゆるヘブンだと慕われるような国に仕上げて行かなければいけない。ここに先祖の真意がある。

千年先か二千年向こうかなのかは、我々の努力次第で分かりませんが、その一番最初の粗削りの基礎の役目を、どうもこの私が仰せつかつたらしいのです。

大倭の宗教改革

世界にはいろんな宗教がございます。どの宗教も神様の心から見ればやや物足らん、神意に沿っていない面が多い。そこで何一つ色に染まっていない神意に基づく大倭教として、世界に伸ばしていかねばいけない。

だからと言って、大倭教はいかなる宗教とも対立闘争を持って広げて行くつもりはない。大倭の宗教はただ真面目に神意に基づいて動いておりさえすればいい。丁度闇夜が明け昼へと変わっていくように、いい具合に争いもなしに静かに変わっていく。大倭が他宗教に対して抵抗や反抗という感情を何ひとつ持たずに、ただ神意に基づいて進んでいけば、世界の宗教というものは争いなく、自ずから大倭のような本質的な行き方に切り替えていくだろう。

結局、キリスト教はキリスト教なりの、神ながらの道に沿った宗教に切り替えていくだろうし、また仏教も熱帯のインドの教えに拘らない、我々が言う神ながらの法に沿った仏教に切り替えていくだろうと思います。

世界の宗教は何も形は変える必要はありません。現在の各宗派は多色彩でいいんですから、そういう姿のままにおいて、大倭の方向に全体が動いていくような世界の宗教になると思うんです。

霊界の方もそういうように動いておるんですから、必ずや現界はそうなっていくと私は信じております。

けれども霊界の時間は人間界と違ってちよっと長いですから、これは何時出来るか約束出来ない。大倭の宗教改革は、内容が複雑であり非常に難しいですが、簡単に言えば、神様の心に沿った、神ながらの法によって大倭の宗教は伸びていく。世界の宗教も歩調を合わせてそれに付いて来る。世界の宗教を動かす推進力の役目を受け持つおるのが大倭の宗教であるんです。霊界はそうおっしゃっておるんです。

決意

丁度終戦の年に、約二十年後になれば大倭は本格的に動かなければいかんぞと言われたんです。来年一年過ぎますと、次の年は昭和四十年。霊界の方から指示を受けた年がもう間近に迫って来ている。私もそれを意識しておるかも知れません。現実の世界では今のところは、本家本元が、見てのとおりこういうような状態です。ある程度人が寄って来てても雨露のからん程度の家も必要だし、遠方から人が来てても一晩二晩でもゆっくり泊つてもらえるような簡単な宿舎の設備を、準備する必要があります。結局は無理をしない程度において来年は人間としての受け入れ態勢も必要だろうと思うんです。

来年一年間の準備期間をおき、印刷物やテレビやラジオなど現代の文明の利器を利用して昭和四十年からは誰彼遠慮会釈無しに、神ながらの道に即した神意に基づく大倭の宗教として、私は全国或いは全世界にまで広め、大いに羽ばたく決意しております。皆さん方もどうかそのおつもりで

大倭の将来というものに期待を掛けてもらって、それと同時に各自が自分を反省し、自己の人格的な向上に努めて、皆さん方自身が大倭の教えでもってお互いに動くというところに誇りを持って頂きたいと念願するのです。(文責・編集部)

表紙写真について

平成二十年十二月二十三日は、大倭六十五年元旦・日聖祭の日でした。

この日、秋に宿禰館の改修とここ土師部社が整備されたのを機に、杜をあらためて神域として自覚しようとする清めの祭事が行われました。これからは、従来から毎年、大倭神宮の年始祭の前に行われている法主奥津城や邑内の守護諸霊へのご挨拶と同様に、神事の一つと決められました。

現在土師部社にある碑には、表に「土師部社野見宿禰住居址、裏に、大倭三年・昭和二十二年十月三十日 法主日聖遷住記念建之」とあります。

野見宿禰は、日本史広辞典(山川出版社)によると、土師連(のちに宿禰)氏の祖とされる。垂仁皇后の日葉酢媛命が死去した際、殉死の習俗の悲劇を奏上すると同時に、出雲の土師部百人を指揮して墳輪を作りこれを陵墓にたてることを進言したという。以後、土師部が天皇の喪葬を司ることになったとある。七八一年、根拠地の大和国添下郡菅原郷・現・奈良市菅原町付近)にちなみ土師宿禰より菅原宿禰に改姓。

法主さんは「この殉死の習慣を止めさせたのは、福祉の心そのものでもあると言っておられます。昭和四十六年一月一日、大倭安宿苑が運営を受託して奈良県立菅原園が出来た時、その名を「菅原園」とされたのも、この話を聞かれた当時の県知事の発案であったということです。

土師部社については『おやまと』平成四年十一月号の「大倭あちらこちら」にあります。

大倭あちらこちら (第24回)

大倭の樹木たち(6)

「交流の家」の前のヒマラヤ杉

交流の家の前庭に、まるで建物^{たて}を庇^{かば}うかのよう
に高さ二十メートルばかりの堂々たるヒマラヤ杉
が立っているのをご存知だろうか。マツ科のこの
樹の幹の太さも、根元から一メートルのところ
で二メートル三十センチ余りあり、力強く逞しい姿
である。この樹が交流の家と切っても切れない深
い縁でつながっていることを、今回は語ろう。

ハンセン病快復者の宿泊施設として、F I W C
関西委員会の青年達によって交流の家建設運動が
はじめたのが一九六三年のことである。ハンセン
病快復者である白系ロシア人のトロチエフ氏
が、快復者である故に東京の宿泊施設での宿泊を
断られた。その話を、当時同志社大学教授であ
った鶴見俊輔氏から聞いたキャンパーの柴地則之
氏が、この話しをF I W Cの委員会に持ち出した
のが、この運動の発端である。柴地氏は、その年



の九月二三日の大倭の月次祭の日に、建設用地の
提供を法主様に頼みに行く。その時のことを法主
様はこう記している。

《……遠慮がちに解説調で話しかける彼の態度に
同情するような気持で聞いていると、皇后さん
(光明皇后)の明るい微笑が前をかすめたりする
ので、いろいろな意味を含めて笑いが暫く止まら
なかった。来るべきものが来たという実感以外は
何もなかった。》(『やわらぎの黙示』一三三頁)

一九六四年八月、起工式のあとに基礎工事の
ワークキャンプが開始された時に、地元住民約百
五十人が建設反対のために押しかけ、その後、ね
ばり強い話し合いによってやっと調停が成立したの
が半年後のことだった。そして、新しい設計図に
よって基礎工事を再開したのは翌年の七月のこと
だった。若者たちは、資金集めのための街頭募金
や、全国のハンセン病療養所への調査をかねたキ
ャラバンなどにも東奔西走した。

そして、運動がはじまってから四年余り後の一
九六七年七月三十日に、三晩徹夜の突貫工事を終
わって竣工式を迎えた。そのセレモニーの最後に
ヒマラヤ杉の記念植樹が行われたのである。

この時の突貫工事について、建設キャンプの総
リーダーを務めていた長沢俊夫氏は、七月二九日
の「建設日誌」の中でこう書いている。

《……今日中にやらねばならない。……今夜は徹
夜作業になりそうだ。……じつとあちこち見えて
いるだけで何も言わないのに、全員狂気の如く働い
ている。すでに夜の一時、こんな気持の良いは
初めてだ。嬉し涙がとめどなく出てくる。……太
陽がのぼってきた。二階の電気のスイッチをつけ
おえると急にボーとめまいがした。終わったのだ。
……太陽がまぶしい。》

当時の熱気が伝わってくるようである。

竣工式には約百五十人の来賓やキャンパーが集
まり、参加者全員が肩を組んで「心さわく青春の
歌」を合唱する中でテープカットが行われた。そ
の中にトロチエフ氏の姿もあった。来賓の人たち
の心のこもった挨拶が続いた。そして、当時の委
員長であった矢部顕氏によって「交流の家宣言」
が読み上げられた。

《……「むすびの家」、それはらい快復者をも含
めた私達人間全体が、「交流」を通して、「むすび」
に至るための一つの拠点であります。……私達は
「むすびの家」の上につけられた形容詞、「らい
快復者社会復帰センター」という字句が全く意味
を失う日、つまり、この世から一切の差別が消え
去る日——その日においてこそ、「むすびの家」運
動が成就するのであると確信いたします。》

一度ぜひ全文を紹介したい格調の高い宣言であ
る。

最後に、この運動に全面的な協力を惜しまな
かった愛生園の鈴木重雄氏のシャベルで、このヒマ
ラヤ杉の記念植樹が行われたのである(当時の記
録写真。手前の人が鈴木重雄さん)。この苗木は、
その年の秋に一度植え替え
られたのである
が、その後
すくすくと伸
びて、四十年
後には現在の
ような逞しい
姿に成長したのである。



この樹には、交流の家建設に情熱をもってねば
り強くかかわった当時の青年たちの心が、しっか
りと刻みこまれてるように感じられてならな
い。

(岸田哲記、齋藤正宏写真)



第13回賑栄の塾「ひとり一人の水俣からゆのちの対話へ」 こんな日が来るのを待っていた

08年10月11〜13日 熊本県水俣市 高倉敦子

こんな日が来るのを待っていたと、沢山の命がささやいた。消え入りそうなかすかな声を聴くために、私たちはこの地に引き寄せられたのかも知れない、ふとそんな気持ちが出て来たのは、賑栄の塾(1)が終わって随分たつてからのことだった。

阿木さんから「水俣で」と声をかけて頂いたものの、何の用意もない私は内心とまどい、そして「やる」と決めた。これも後になってわかったことだが、「やりたい」と言ったのは私を潜り抜けた向こう側からのささやき。その声に応えたいと願いをかけた。

「まつりのための一理塚、わいわいがやがや賑栄の塾——縁あってたどりついた水俣で、沢山の命とつながりました。大半は出産、子育て、そして助け合い……。やがて30年という節目を迎えます。この辺で一度我が身を振り返ってみよう。それにはジャンルを超えて(??)他者の言葉に出会うこと。そう、水俣は語り部満つる里なのです。大切なものもある時間。突然降って湧いた「賑わいの塾を水俣で」の声が、おおきなはずみとなりました。

水俣病公式発見から50年を過ぎはしたけれど、いったい何だったのか?というような話です。今度は「日本一大きい産業廃棄物処分場を水俣の水湧く森に作りたい」という会社が出て来て、しかし再び立ち上がった市民の4年間にわたる運動の成果は見事に実り、この春、とうとう事業は撤退を余儀なくされた。ただ一番気がかりなのは、残された森の行方と私たちひとりひとりのあり

方。同時に、水俣を撮り続けた記録映像作家の土本典昭さんが冥途に旅立たれたことも大きな意味を感じます。水俣の地での賑栄の塾開催の運びは、ひよっとしたら海、山、川、流れる水たち、魚たち、クマタカや隠れ棲んでいた生き物たちからの絶え間ない呼びかけに違いない、だからこれは待ちに待った招待状なのです。

沢山の命が、このなりゆきを、ぞろぞろと見物にやってくるかもしれせん。古代さぞかし賑わったであろう水俣の山あいの温泉にて、集い、語り合う、ひとときの宴を楽しんでいただけなら幸いです。と浮かぶままに発してみたら、何かがほどけて動き出した。

ゲストとして栗原彬さん(2)との対談を緒方正人さん(3)にお願ひし快く引き受けて頂き、おまけにひとり一人の水俣からのちの対話へ」と、正人さんの中から湧き出した言葉が私たちを後押ししてくれる。事務方の大嶽さんがあらゆる心配を一手に引き受け、目配りオーケー。

ふらふらと、水俣湾埋立地の一部に残されていた自然海岸に時々行つては、沈む夕陽のすこい色を眺めたりしながら4年前に拾った石笛、それを持って森に向かう産土様参り、七滝めぐり、鬼嶽登拝、自然と思いつきでやっていたことが全部この集いへと繋がっていく。いよいよ間近になって突然、埋立地にひっそりと残されているという噂の「アコウの木」に会いたくなり、実際その場に立った時、「ここだったのか……」という思い。長い間待っていたと、声なき声がそう言った。

10月12日、バスを一台チャーターし、とにかく水湧く森から水を頂き竹筒に汲み、参加者31名とともに水の流れをたどって海へと向かうこと、その水を不知火海へ、そしてアコウの木まで運ぶことだけははっきりとしていて、それはかねてからの願ひであったに違ひなく、わけもなくるんと弾む。水は生まれて来たことを喜んでる。ついにそのお水を届ける日はやって来て、大きな石を抱いたアコウの木とひとつになった瞬間に光。午後の座談会の席で、水俣生まれの洲上さんは40代の女性として、心にくくもっている思いを声に出してくれた。「私たちの年代は水俣病のことを話題にしたくないひとがほとんどです」と、ここから和合への扉は一気に開く。願ひは叶い、対話が始まった。大きい声や強い言葉にかき消され、つついっ耳に入れずにすまして来たことを、彼女はこの日、川の音にのせて見事に語ってくれた。言葉が開かれるときってこういふことなのだ、深く揺さぶられ心がしんとする。

長いことがんじがらめになっていた私たちがここでこうして出会い、結ばれ、ほぐれていくのを感じて見ている存在がきつとある。まるでその時アコウの木が深呼吸をひとつしたような気がしたのは私だけだろうか?

夜の交流会に水俣のひとたち30名ほどが溶け合っていて、思いもかけない大宴会。かつての運動で対立関係にあったひとたちが「あの時はどうも」とお互いにテレ笑いで握手。沖繩のうたでみんなが踊りだす、夢のようだが夢ではなかった。とびきりの笑顔に包まれて、旅館のひとも喜んで、知らない間にみんな魔法にかかったようにはしゃいでいるのがなんとも嬉しかった。

翌朝、会場となった湯の鶴温泉あさひ荘では、実は沖繩戦で疎開してきた児童を預かり面倒を見

ていた時期があつたと教えられた。きっと子どもたちもいっしょに輪の中で遊んでいたんだね、ありがとう。まさかこんな日が来るとは思わなかった。終わって始まるこの先、花は咲き、開き、測上さんと育てて行くことを思ったら、法主さんがこつと笑つたように感じて、ただただ見守つて下さっている全ての存在に、心からの感謝を捧げます。

(1) 00年11月の第5回「いのちのあり方を考える」・03年10月の第8回「いのちのつながりを考える」を大倭紫陽花邑で開催。

(2) 1937年生まれ。立教大学名誉教授。水保フオーラム代表。編著『証言 水保病』。

(3) 1953年熊本県芦北町女島の網元に生まれる。父親の福松さんが急性劇症型水保病で死去、ご自身も発病。患者有志で「本願の会」発足。

8 差点

子供から学ぶこと

奈良市 井野佐緒里

私が親にならせてもらって、一番に感じたことは、両親への感謝の気持ちでした。子供を育てることがこんなに大変だとは思ってみなかったからです。特にうちは男の子一人。じつといてないし、動きも激しい。私にとつて子育ては、楽しさ反面、毎日が戦争でした。自分が子供の頃、「親の似てほしくないところばかり子供が似るから困る」と笑って話している父の言葉思い出しました。

今、私のやつてることを子供はそのまま真似をします。親子とは、喜怒哀楽を共にし、一緒に成長していくものなんだなとつくづく感じました。これから少し、私の子育てについて記したいと思います。平成十五年一月十日長男智英、平成十

七年五月十九日次男慶英とびひが生まれました。彼らの産声は今でもはつきり覚えてます。初めて赤ちゃんと対面し我が子を抱かせてもらった時、温かくその柔らかな感触に言葉を失いました。あの出産の痛みとつわりの苦しさもすっかりどこかに飛んでいってしまった。

余韻に浸る間もなく、三時間おきの授乳、おむつも交換、赤ちゃんが何故泣いているかわからない……。病院にいる間は、できなければ助産師さんがやつてくれます。退院したら本当に大丈夫なんだろうか？こんな私に赤ちゃんが育てられるのだろうか？と不安になりました。それと同時に、親になった責任も感じていました。

退院後、実家で一ヶ月お世話になり、母が仕事を休んで身の回りの事をしてくれました。父も赤ちゃんの沐浴をしてくれました。本当にありがたかったです。私は、赤ちゃんの世話をするだけでよかったです。身体を休ませる事ができました。自宅に帰宅してからが大変でした。主人は仕事

が忙しく、平日は全て私一人で家事と赤ちゃんのお世話をすることになりました。

智英が生まれるまで会社勤めをしていた私は一年前に引越してきた自宅で、ご近所の付き合いもなく、何もかもが一からのスタートでした。

冬生まれの智英に風邪をひかすまいと部屋の温度・湿度に気を配り、首のすわらぬ赤ちゃんを一人でもどうやってお風呂にいれようか、考えました。心配事もありました。智英はアトピー性皮膚炎の症状が出て、特に顔に湿疹が出ていました。そして母乳も粉ミルクもよく飲むのに便秘気味でした。十日間便が出なかった時は、神にも祈る気持ちでした。春になる頃には、首もすわりベビーカーでお散歩に出かけました。五分程歩くと、田んぼがあつたり、あせ道があつたり、自宅周辺はまだ

自然が残っていました。智英に声をかけながら自分も四季を楽しみました。大倭で自然が遊び相手だった頃をなつかしく思い出しました。

二人目の妊娠、出産、確実に私は強くなっていました。慶英は、生まれて一ヶ月検診で心臓に雑音があると指摘され、近大病院を紹介されました。私は自分に責任を感じ、涙が止まりませんでした。結局、半年後雑音は消えていると診断を受け、肩の荷が降りました。

二人の子を抱え、私は必死でした。育児は、三六五日休みがありません。私の唯一の支えは、実家が近かったことです。主人の実家は遠方でした。もし、何もかも一人でやらなければならず頼る場所がなければ、確実に私は育児ノイローゼになっていたと思います。両親の「ご飯食べに来てもいいよ」、煮詰まる前にいつでも来たらいいから」という言葉に何度励まされたことが。子供を授かったことで、自分達を育ててくれた両親の偉大さ、人生の深み・本質を知ることができたと思っています。本当に感謝するばかりです。

私の名前は、佐緒里さおりと書きます。これは、緒という言葉に「人と人を繋ぐ」という意味で名づけてくれたそうです。母になるまでは、それが私の生まれてきた使命だと思っていました。今は、それにプラス、息子達を立派に育て上げるのが私の使命だと思っています。

また、元氣いっぱい息子達に出会いましたら、声を掛けてやってください。最近は二人ともよく「はやくし……」と言うようになりました。一日一日を大切に、子供と共に成長していきたいと思えます。

長男智英の今の夢は「虫博士になること」、次男慶英は電車、新幹線が大好きです。皆様、今後ともよろしく願います。

あじさい日記

12月14日 朝8時から大倭墓地の清掃、9時からは、掃除機として紫陽花邑の大掃除。須賀道の交通安全のため、教長さんのお清めのと西斎庭にある柳の木が一部刈り取りされました。
 12月15日 大倭神宮月次祭。
 この日、本紙編集部員で紫陽花邑で生まれ育った千久ちゃんこと中村千久佐さんが勤続35年8ヶ月の大倭印刷(株)を退職。
 (編集部はやめません)
 12月16日 横浜の高杉一空さんとその俳句仲間9人が来邑。
 12月20日 大倭神宮や邑の諸所に門松が飾られました。
 12月21日 午前10時より大倭神宮の大掃除。作業が無事に終わって、賑やかに皆でお昼の弁当を食へ解散した頃からさらさらと清めの雨を頂きました。
 12月22日 朝から鏡餅作り、昼から拝殿掃除・注連縄取り替え等の準備が行われました。
 12月23日 大倭65年元旦。地球の動きは、冬至が明けて春に向かい始めます。古代の中国には、この時からを新年とする暦もあつたそうです。
 日聖祭で大勢の皆さんがお参りされました。これに先立つ邑内のご挨拶回りで、今年も、初めて土師部社記念碑前でも神事が行われました。(4頁参照)

午後は、今年も長曾根寮あじさい広場で直会演芸会。藤本宏秋さんの友人、後田竹次郎さん(長崎市)自作の大きな紙芝居もありました。
 12月26日 昇ちゃん、夜行バスで帰省。近鉄奈良駅まで青山法義・元子夫妻に送ってもらい、横浜駅で弟さん(神奈川県横須賀市)に出迎えてもらいました。1月5日朝、元気に帰邑。
 12月30日 餅つき神事が行われ、交流の家で年末キャンプ中のF.I.W.Cや邑外からの子供達も参加して賑やかでした。
 12月31日 夜11時35分から拝殿で邑やF.I.W.Cの若者達によりその年1年間の禊祓いに1日を1回として366回の大太鼓打ち神事が行われました。
 1月1日 午後1時より法主様奥津城や邑内の諸霊にご挨拶をして、2時から大倭神宮で年始祭が行われました。晴れたりみぞれが降ったりの天候で、須加宮寮の皆さんは恒例の初詣を中止しましたが、それでも参拝者が境内を溢れるほどでした。
 1月5日 午前11時より大本宮拝殿において大倭安宿苑・大倭印刷・大倭殖産・大倭大本宮等の新年初出の会がありました。
 1月6日 大倭神宮月次祭。
 午後7時から大倭会館での邑僚の会が、新年会として邑人や縁りの皆さんと一緒に行列ややかに鍋をつつきました。

大倭安宿苑では12月20日 奈良パークホテルで各施設職員が一堂に会して年末懇親会が行われました。
 (菅原園)
 1月6日 住死者・職員が共に大倭神宮に初詣をしました。
 (須加宮寮)
 12月23日 直会演芸会でフラダンス、そのアイディアは良かったが練習不足でした!
 (長曾根寮)
 12月25日 (デイサービス)おやつ作りは「パスタルト」。
 1月5日 書道で「お正月」「こたつ」「初日の出」を書きました。
 (茂毛路園)
 12月24日 各フロアでクリスマス会。(写真下)
 (八重垣園)
 投句箱より「菊の花歩を止めて見る仄かな香」「菊供う小さき地蔵の眉ほそく」
 俳句の風物
 上田森彦(98歳)



法主帰幽祭 ご案内

日時 平成21年2月9日(月曜日)

● 午後1時半より法主様奥津城においてお参りをいたします。
 ● 午後2時より大本宮拝殿において帰幽祭をとり行います。

現身はよし朽つるとも永久に

結ぶ心のかわるものは

法主様の奥津城に記されてある右のお言葉を皆さんはどのように受けとめておられますか。ゆっくり考えてみませんか。

宗教法人 大倭教

去年今年貫く棒の如きもの
 高浜虚子
 俳諧が一変して明治に俳句となり、大正・昭和と容が多様化した中で、花鳥諷詠客観写生を貫いた虚子晩年の作。
 曾孫に婆持たされて婆の正月(自由律)
 森彦

あんない

* 玉緒祭(大本宮)
 2月3日(火) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感じ謝するお祭り。玉は命を、緒はひもを言ふ。
 * 月次祭(大倭神宮)
 2月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。
 * 大倭会主催第四八二回禊祓
 2月8日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 * 法主帰幽祭
 2月9日(月) 上欄参照。
 * 月次祭(大倭神宮)
 2月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。
 * 申孝祭と月次祭(大本宮)
 2月23日(月) 午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。
 申孝祭について詳しくは、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流——長曾根邑のすめらみこと」等をお読み下さい。